

若者ことばにおける曖昧表現の形態および意味構造の変異について —テレビドラマのデータベースの通時研究への利用を目指して—*

桑本 裕二

A shift of morphological and semantic structures in ambiguous expression of Japanese youth jargons *wakamono-kotoba*:
Approaching a diachronic study with a database of a TV drama

Yuji KUWAMOTO

(平成25年11月25日受理)

In general, *wakamono-kotoba* i.e. a kind of jargons in Japanese younger generation are rather unsettled ones, so they are liable to disappear in a short time. On the other hand, quite a few words are stable and settled for a long time. These words include ambiguous expression because they have already been as standard vocabularies and had appropriate morphological and semantic structures in the standard word usage. In this paper, I introduce ambiguous expression in stable *wakamono-kotoba* as a long-term-surviving words, and analyze them morphologically and semantically.

I made a database of a TV drama broadcasted in 2013. It shows that the database is the first step to a diachronic study of *wakamono-kotoba*, if possible, contrasted with another database in a different era, such as in 1990s or 2000s. This is just a pilot study so far.

1. はじめに

若者ことばは、米川 (2009, 2012), 永瀬 (1999) などの調査結果に基づくと、多くの語は、その出現は唐突で、使用期間が短く、すぐに消えてしまうか他の語や表現に置き換わる。その一方で、長い期間にわたって使われたり、若者以外の世代にも幅広く使用が行き渡り、通常語彙の俗語的なものと位置づけられるところまで進化する語も少なからず存在する。本稿では、若者ことばのうちでも長く使用され、幅広い年齢層に使用されるものの特徴を考えた場合、曖昧表現が顕著である点に注目し、これらの意味分析や、形態構造上の特徴などについて分析したものである。さらに、最近筆者自身が作成したテレビドラマの台詞のデータベースについて、若者ことばの会話データとしての利用可能性を検討し、今後に向けての若者ことば通時変化の研究への礎とした。

2. 若者ことばの発生、流行と定着

若者ことばは、その担い手である若者世代を主な使用者とし、「若者文化」としてまとめることのできる特有のサブカルチャーのなかで運用されるもので、米川 (2000b, 2009) によれば、「若者」という一種の特定集団に使用される「集団語」と定義される。米川 (1999: 41, 2000a) はまた、若者ことばは会話の「ノリ」を大切にしたことばの娯楽であるとし¹⁾、所詮は「遊び」のことばであるから使われなくなったとしても一般人には何の問題もない、と述べている (米川 2013: 84)。

こういった言葉遊びとしての機能を楽しむ若者ことばは、総じてその使用期間は短い (永瀬 1999)。米川 (2000a) は若者ことばの言葉遊びとしての特徴を次の9種類に分類している。

(1)

[1] 語呂合わせ (いただきマンモスなど)

[2] もじり (アリラー (<アムラー) など)

若者ことばにおける曖昧表現の形態および意味構造の変異について—テレビドラマのデータベースの通時研究への利用を目指して—

- [3] 読み換え（だつりき<（脱力）など）
- [4] 言い換え（ホワイトキック（<しらける）など）
- [5] 漢字の分解による（彦頁（<顔）など）
- [6] 頭文字化（MMK（<もててもててこまる）など）
- [7] なぞなぞ式しゃれ（ネズミしばく（=ディズニーランドに行く）など）
- [8] 形容に基づく転義（バーコード（頭が禿げた）など）
- [9] 人にたとえる（聖子ってるなど）

ここに分類されている語群は明治時代から現在までのものとされているが、古すぎるものは除いたとしても、一過性の流行語の域を出ないものが多い。このような使用期間の短い若者ことばとして、代表的な語として1990年代後半に出現した「チョベリバ」を挙げることができる。これは「チャー・ベリー・バッド」（「とても悪い」という気持ちの表現）の略したもので、小矢野(2002)によると1996年の「ユーキャン新語・流行語大賞」（自由国民社『現代用語の基礎知識』選）のトップテンに入り、当年は新聞や週刊誌で好んで使われたということである。「チョベリバ」が簡単に廃れた理由としては、マスコミが使用をおおったという社会的背景から流行語として広まったこと、また、省略のない「チャー・ベリー・バッド」ですら英語であって普通に意味を追にくい上に、これをさらに省略して「チョベリバ」などとしたために、これを全くか滅多にしか使わない人たちにとっては、元々の示す意味が復元しにくいことなどが考えられる。音声的には小気味よく響き、いわゆる「ノリの良い」ことばとして楽しめる要素はあるものの、それだけでは定着する力は弱い。

また、いわゆる「KY語」と言われる、ローマ字化した上での頭文字語も使用期間は短いものが多い²⁾（米川2012:46）。その理由としては、「チョベリバ」の場合と同じく、元の意味が復元しにくいということがある。桑本(2010:69)は、「KY語」がなんとか幅広い年齢層に知られ、使われるようになった理由として、「KY」が使われ始めた初期に、「KY。空気読めない。」のように、本来の語形を後に続けて語句の解説をするように言われたことを挙げている。元の語形や意味が復元しにくいということは、隠語性が高いということであり、そのこと自体は若者からすると他集団から理解されにくいことを逆に楽しんでいることでもあり、このことは「ノリのよさ」とともに若者ことばの本質的な特徴とも言えるものでもあるが、定着し、時間的に幅広く使用されることからするとむしろ逆行しており³⁾、それゆえ使用期間も

短い。

このように、若者ことばは、遊びのことばを楽しむという特徴をもちながら、多くの流行語と同じように流行り廃りを繰り返す。小矢野(2002)は、流行語は世相の流行とともに始まり、流行が終わると流行語も終わると述べる。若者ことば、あるいは若者が気軽に使用する流行語である、時流に乗ったお笑い芸人が流行らせた流行語は、その多くは翌年にはもはや使われることはない。たとえば、ここ5年をさかのぼり、「ユーキャン新語・流行語大賞」の当年のトップテンに選ばれたもので、お笑い芸人の決めぜりふであるもの(2)の通りであり、2013年末現在、好んで使われるものはない（桑本2010,2013、括弧内は台詞をしゃべった芸人、流行年）。

(2) ワイルドだろお？（杉ちゃん、2012年）

ラブ注入（楽しんで、2011年）

整いました（Wコロネずっち、2010年）

グ〜！（エド・はるみ、2008年）

※2009年は当該語彙のトップテン入りなし

その一方で、(3)に示すような語群は、一度定着しただけで使われ続けられる。

(3) マジ・ムカツク・ぶっちゃけ・イケてる・合コン・就活…

若者ことばが定着する条件については、桑本(2003a)で次のようにまとめた。

(4)

[1] 使用場面が多いこと

[2] 形態的派生が存在すること

[3] 意味の転換

[4] 曖昧な表現

[5] 符丁的すぎるものは定着しない

[6] テレビを通じて流行った芸能人の言動を発生源としたものは定着しない（上記(2)参照）

永瀬(1999:24)は、寿命の長い語は使用頻度が高い、(大学生の)生活に密着して遊びの要素はむしろ少ない語に限られているとしている。桑本(2003a)による、(4)-[1],[2]の特徴などに関しては、米川(2013)は、「応用が利く」という言い方で、定着の条件と考えている。また、桑本(2010:119ff.)は、「マジ」を引き合いに出し、定着していく若者ことばの特徴とし

て、使用頻度の多さ、派生形の多様さなどを挙げている。

以上、見てきたように、若者ことばには、ほんの短い期間だけで使用が終わり死語となっていくものもある一方、長く使われ続ける語もある。永瀬(1999)、小矢野(2002)などは、流行語の一部としての見方から、ほとんどの語が数年で飽きられて他の語に変わっていくという運命にあるとしている。また、「ノリのよさ」を追求するという米川(1999, 2000a)の指摘からしても、盛衰のスピードは速く、寿命が短いということは運命的に若者ことばが担っている主要な特徴であるとも言える。

次節では、若者ことばの使用期間、いわば寿命について分析したいいくつかの先行研究を紹介する。

3. 若者ことばの寿命

米川(2009: 579ff.)は、『現代用語の基礎知識』の1980年版～2008年版の若者用語の欄に掲載されている語のうち、サ行で始まる語だけを取り出し、それらが何年掲載されていたかを調査した結果を報告している。それによると、上記29ヶ年分に掲載された488の異なり語の掲載年数はおよそ次の通りである。

(5)	23年	1語
	17年	1語
	15年	2語
	14年	1語
	:	
	3年	46語
	2年	70語
	1年	273語

半数を超える語がわずか1年の掲載しかない。平均を取ると2.6年である。つまり、大半が3年未満で消えていくということになる。

米川(2012)は、自身が1990～1992年に収集した学生語(キャンパス用語)339語に対し、2012年に30名の学生に対しての使用頻度の調査を報告している。米川(2012)によると、被験者30名のうち「使う」と答えた人数が全体の2/3である20名以上となった語は58語、一方、全員が「全く使用しない」と答えた語数は118語、1人または2人のみが「使う」と答えた語を加えると170語となる。こちらの調査からは、1990年初頭から2012年の約20年の間に、

半数の学生語は消え、1/3の語は使用される。残り1/6も少数の使用はあるもののやがて消え去る運命であろうと推測している(米川2012: 46)。

永瀬(1999)は、1988, 1990, 1992, 1996年の4回にわたって専修大学の学生用語を約4000語収集したが、そのうち常に出現した語は49語だった。これは全体の1.2%に過ぎず、後ろ3回の調査にすべて現れるという79語を加えても全体の約2%で、結局、キャンパス言葉の寿命を2～5年としている(永瀬1999: 16)。

4. 若者ことばの寿命の長さと言種

第3節の3つの先行研究からの報告は、種類や時期、年数はそれぞれであるにせよ、概して、若者ことばの寿命は短いということを導いている。逆にいうと、寿命の短い語は若者ことばの典型を表していると言えるが、その最大の特徴は、米川(1999, 2000a)の指摘している「遊びの感覚」「ノリのよさ」であろう。たとえば、米川(2009)の「2年掲載」の項の最初のいくつかを羅列すると以下の通りである(1年の掲載語は多数により割愛してある)。

- (6) さいちば・さいなら・さくい・さくる・さだはる・さぶー・座布団・さむー・さよなら・...・スパークする・すまそ・スリマー・スルーする・すんまそん...

米川(2012)の調査語には、20年前のキャンパスことばで現在使われてない語として、次のような語を挙げている。

- (7) イケイケ・オタッキー・ダサダサ・鬼のように・バッチゲー・アッシー君・エッチする... (米川2012: 47より抜粋)

(6), (7)を見る限り、音連続や他の事物へのもじりなど、「ノリのよさ」は感じられる。

また、米川(2012: 48, 2013: 88)では、多くの若者ことばが(一般の)流行語と同じ性質をもち、それゆえ、バブル期を象徴するような人に関係した語(8)は死語になっていると結論づける。

- (8) アッシー君・エレガー・ボディコン・ワンレン・デューダする・トラバーユする

若者ことばにおける曖昧表現の形態および意味構造の変異について—テレビドラマのデータベースの通時研究への利用を目指して—

一方、寿命の長い若者ことばについては、米川 (2012, 2013) では、紹介されている学生のレポートの結果から、以下のように類別している。

- (9)
- [1] ファストフード店を省略した語：「マック」「ロイホ」など
 - [2] ケータイに関する語：「メル友」「着メロ」など
 - [3] 口癖のように使う曖昧表現：「～って感じ」「逆に」など
 - [4] 男性を形容する語：「イケメン」「チャラ男」など
 - [5] 「る」ことば：「ドトル」「ジョナる」「ぼこる」など

永瀬 (1999) は、調査結果から、調査期間の 10 年間使われ続けた語の特徴として、

- (10)
- [1] キャンパスライフに関する語
 - [2] キャンパスについての地名や場所の名前
 - [3] 学生がよく行く地名

などに類別できるとしている。(9), (10) を関連づけると、若者 (または学生) の日常生活に必要な事物や行動を表現するために必要な語がここに類別されていることになるが、その限りにおいて、「遊び」の感覚や「ノリのよさ」は主要な特徴とはみなされない。米川 (2009) の、『現代用語の基礎知識』の若者ことばの項より、29 ケ年分の残存状況を示したもの (前節 (5) のリスト、ただし、サ行ではじまる語のみ) から、長く掲載された語を示すと次の通りとなる。

- (11) 死んでる (23年掲載)
- さむい (17年)
 - ～じゃん (15年)
 - そっこ (速攻) (15年)
 - ～状態 (14年)

これらの語を見る限り、「～じゃん」を除いては、すでに普通語彙として存在していて、意味する対象や状況が変わっているというものであることがわかる。これは、寿命の長い若者ことばの代表的な特徴と言える。

5. 「曖昧な表現」の定着性と通時的变化

「曖昧な表現」は前節 (9)-[3] に分類されているよう

に、寿命の長い若者ことばの代表的なものと言える。桑本 (2010: 39ff.) でも、現代の若者ことばの主要な特徴として挙げた。「曖昧な」という語義の通り、そこには「ノリのよさ」はそれほど重視されない。また、内館 (2013) が取り上げている多くの例が示すように、特に非研究者が気になる言い回し、聞き捨てならない奇妙な言い方、として指摘できるためには、その語形自体は一般に通用しており、規範的な使用のもとでは何ら問題なく使われる言語表現でなければならない。なぜかと言えば、過度な省略を含む、またはノリを楽しむことを中心的にして造語された語は、解説なしでは理解できず、批判をする土台に上がることすらしないからでもある。

内館 (2013) が取り上げた言語表現は次のようなものがある。

- (12) かな・みたいな・感じ・とか・かも・～のほう・～というふうに・ある意味・～じゃないですか・的・大丈夫ですか・普通に・よろしいですか・ホントですか…

これらはいずれも、既に規範的に使われているか、語形変化が容易に復元できるものばかりである。内館 (2013) による批判は、これらの誤用、またはおかしな文脈、発話中の位置などによるものである⁴⁾。

これらの表現は、一応、言語形式としては規範的な語彙として存在するために、「若者ことば」の語彙として取り上げられることから見透かされるという危険性がある⁵⁾。いわゆる「典型的な若者ことば」として単一の特徴的な語彙として取り上げにくいという実情もある。もっとも、『現代用語の基礎知識 2014年版』(自由国民社、2014年1月発行)の「若者」の項を見ると、一応、これらの語、例えば、「～系」「～状態」「～的な」「～のほう」などは掲載されていた。

テレビドラマ「最高の離婚」(2013年1月～3月、フジテレビ系)では、象徴的に次のような言い回しが多用されていた。

- (13) どうなるんだろう的な
鳥になりたい系の人ですか?
もう少しいますか的なことに

内館 (2013: 196) は、上記の表現に対する批判の投稿を取り上げてその違和感について論じている。

「～的」に関しては、北原 (2004: 71ff.), 内館 (2013: 193ff.) などによると通常の使用から順に次のような使用の拡張がみられる⁶⁾。

- (14)
- a. 漢語につく（感情的、抽象的など）
 - b. 和語につく（わたし的には、気持ち的など）
 - c. 外来語につく（マニアック的、マニュアル的など）
 - d. 文章、会話そのものにつく（上記(13)の諸例）

(14) に挙げた分類の中で、現在の規範的な日本語として許容されているのは(14a)のみである。形態論的には漢語に限定されていたものが、和語、外来語など他の語彙群にも、「～の上では」「～については」「～の性質を帯びて」「～に関する」といった意味を付加させる接尾辞として拡張して使用されるようになった結果である。このような接尾辞の拡張的な使用には、(13)にも挙げた「～的」「～系」の他にも次のようなものもある。

- (15) おまえにはどうせ無理だみたいな態度
いちごつぶす用のスプーン
全部忘れちゃったっぽい顔してる

これらの例に見られるように、本来は名詞にしか付加されない接尾辞が用言の終止形や、文そのものに付加されるところまで接辞付加が拡張していることは、これまでの規範的な用法と、それまでにない奇抜な語形成の変化をともなっているものが共存しているという点で、全体を統一的にとらえようとする上で「曖昧である」とみなされるのである。

意味や使用場面が拡張された例としては、「大丈夫です」を挙げることができる。たとえば、列車の車内販売でコーヒーを注文したという状況での販売員と客のやりとりでの、次のような「大丈夫です」の使用は今のところ規範的ではない。

- (16) 販売員：「砂糖、ミルクお付けしますか？」
客：「大丈夫です。」

山西(2013)は、「結構です」という受け答えが「承知した、買います(要ります)」の意味と「要りません」の意味の両方に解釈されるため、この手の質問に対して「大丈夫」と答えるのが普通となってきた、と解説する。また、これには、「要りません」と答えるのが、相手に対して強く感じられるためではないかとしている。

このような、接辞付加や意味の拡張は、言語の通時的変化の現れの一つととらえることができる。そして、多くの若者ことばと違い、すぐに消える語彙では

ない。使用期間が長いだけでなく、一度定着したら半永久的に使用され続ける。

6. 2013年の若者ことばの現状

本稿執筆時(2013年11月)における若者ことばはどのような状況であるのか? 『現代用語の基礎知識 2014年版』(自由国民社)は、2014年1月発行であり、ほぼ本稿執筆時における編集である(原稿執筆の2013年11月現在、発行済)。同書の「若者」の項には、9ページにわたり408語が掲載されている。

そのうち、若者ことばの中で最も多く、典型的であると思われる略語⁷⁾であるものは、178語あり、これは全体の43.6%になる。約半数である。若者ことばの特徴を表すものとして、量的にも多いことがわかる。使用場面が多用途、頻度が高いものも多くあるが、大部分は「あげぼよ」「なるはや」などのように、略形が元の語を復元しにくいものも多く、これらの語はやがて早々に消えていくことが予想される。

これに対し、「鉄板」「盛る」「～のほう」「～になります」など、何を具体的に示すのかはさておき、語彙自体、用法自体は規範的なものがすでに存在している、または、若干の変更が施されていてもどうにか理解できることば、と筆者が認定した語は全部で73語であった。これは、全体の408語の17.9%、約1/5である。これらは、第5節で考察したように、いくつかの先行研究によって、使用期間が比較的長く、また、一度定着したらなかなか消えないという語群である。ただし、若者ことばの典型である「遊びの感覚」「ノリのよさ」はほとんど感じられないものである。そして、こういう性質の語は、「現在」という定点的にとらえたとしても、わずか1/5程度である。反面、批評の土台に上がりやすく、問題視されるのもこの語群である。

7. 若者ことばの曖昧表現の通時変化記述のために -テレビドラマの台詞のデータベース化-

前節で述べた、既に規範的な意味でその語形が存在するという若者ことばの語彙は、「～的な」「～系の」などのように、曖昧表現である場合が多い。それは、第5節で考察したように、付加語としての適用範囲が広がったがための曖昧さを包含しているからである。しかしながら、これらの語群は、一般に若者ことばとして認知されにくいという宿命を持っている。それは、語形としてはすでに規範的なものがあるからであ

若者ことばにおける曖昧表現の形態および意味構造の変異について—テレビドラマのデータベースの通時研究への利用を目指して—

る。「～的な」「みたいな」などは、どうにか『現代用語の基礎知識』最新版に掲載されているが、ら抜きことばや、半疑問形（窪菌 2006: 52）とよばれる独特のイントネーションなどは、若者ことばとして掲載される機会がない。それは、分かりやすい語彙として際立たないというせいである。その反面、第5節で論じたように、批判の矢面に立つということは非常に多い。そして、定着の度合いがより強いのもこの種の語群である。

筆者は、この種の若者の日常会話に埋没しがちな曖昧表現、会話表現を記述し、分析するための手段として、テレビドラマの台詞を記述することとした。ドラマは主な登場人物として20歳代の若者が数名登場し、あまり極端な状況ではない、できればラブコメディなどが最適であると考えた。

筆者が試験的に台詞のデータベース化を行ったのは、「SUMMER NUDE（サマーヌード）」（2013年7月～9月、フジテレビ系）である。この連続ドラマは、1回が60分で、第1回、第2回のみ70分の拡大版で放送された。コマーシャルなどの放送部分を除くと60分のうち、正味45分程度である。これが11回分で、記録したのは全部で6146会話（台詞）であった。1回平均558.7会話、1回45分（初回分、2回分は+10分）で、全放映時間515分（8時間35分）とすると、1分あたり11.9会話程度となる。この、8時間35分、6146の会話というデータベースは、会話の資料として量的には充実したものであると言える。脚本に基づくドラマの台詞という状況であり、自然な会話と同一視はできないが、登場人物がほぼ5,6人の20歳代の男女に限られていること、舞台背景が日常に基づいており、医療現場や法曹界、政界などといった極度に専門的な場面設定ではないこと、また、ドラマのシナリオ本やテレビ放映時に選択できる日本語字幕などではなく、音声を手がかりに記述したことなどで、実際の俳優・女優のアドリブの会話も多く混じっていることなどから、自然会話に限りなく近いデータベースとして扱えるのではないかと推察している⁸⁾。

「SUMMER NUDE」の台詞データベースによると、特に文末表現や合いの手のように用いられる、新しく感じられる、または、若者ことばらしいと感じられる主なものを羅列すると以下のものが見られた。

(17)

- a.「マジ」
- b.「てかさー」

- c.「はー？」
- d.「～なんですけど。」
- e.「～嫌いになれなくない↑」という半疑問形
- f.「～してんじゃん」「来んじゃねえ？」などの省略形

これはデータベースの一部であるので、これらの用法については、どれくらいの頻度で現れるのかについて検索することで知ることができる。そして、少なくとも現段階で、2013年の若者集団の言語使用の実態を大まかに表していると言える。

若者の言語使用、特に文末表現やイントネーションに関わることの通時変化を知るためには、「SUMMER NUDE」のようなデータベースを様々な時期のドラマについて作成し、それらを比較することによって明らかになるのではないかとと思われる。今後、1990年代、2000年代のそれぞれの時期に放映された連続ドラマのデータベースを作成し、それらを比較することによって、若者ことばの通時変化、特に曖昧表現やその他の文末表現についての定着のあり方について確認することが容易になるのではないかと推察する。

8. おわりに

以上、寿命が短いとされている若者ことばのなかで、逆に寿命が長い、または、すっかり定着して幅広く使われているものとして、曖昧表現を含むものを中心に考察した。曖昧表現が幅広く使われるようになる主要な理由は、「～的な」「～みたいな」のように、既存の語彙、表現としては、既に存在していることである。既存の語彙として意味をなしたり形態構造が理解できるという前提の上に、それまでに見られなかったような接辞的付加や複合語形成などが拡張しており、そのことが意味を不明瞭にしているために「曖昧な」表現となっている。そして、これらの曖昧表現は、若者ことばとしては抽出して取り上げることが困難である。このような語彙、表現に関しては、一定の量をもつデータベースの利用が効果的である。筆者は試験的な試みとして2013年放送のテレビ連続ドラマの台詞を書き出してデータベースを作成した。

このデータベースを「2013年の若者ことば」として定点的な言語実態を表しているとみなした場合、将来的な取り組みとして、他の年代、たとえば1990年代、2000年代の同種のデータベースを作成して、それらを

相互に比較対照させることによって若者ことばの通時変化の実態を明らかにすることができるだろう。そのような通時研究に関しては、今後の課題としておく。

注

* 本稿は、東北大学大学院情報科学研究科言語変化・変異研究ユニットの研究成果の一部である。

- 1) 「ノリのよさ」を若者ことばの特徴とする考察については、加賀野井 (2006: 112ff.) も参照のこと。
- 2) 米川 (2013: 86f.) は、この種の語彙、たとえば「KY (空気読めない)」「他にも「MT (まさかの展開)」「JK (女子高生)」「DD (大学デビュー)」などは、臨時的造語であって会話を楽しむためのものであるため、飽きられて楽しみが失せると死語になると指摘している。しかし、同論文の別の箇所では造語が簡単で自由度が高いことや、隠語性が高いために婉曲的に用いられること、最近の携帯メールの文面で簡略された文字使用が経済的であることなどからむしろ生き残れる可能性の高い語群であるとも指摘している (米川 2013: 89f.)。
- 3) 桑本 (2003a: 118) は、定着する若者ことばに絞って考えた場合、「符丁的すぎるものは定着しない」という条件を提案した。
- 4) このような、文末表現や副詞的な挿入語の曖昧な意味やおかしな表現形式に対しては、稲垣 (2006) が「最近気になる表現」として曖昧表現を取り上げており、また小矢野 (2013) の「のほう、みたいな」に関する規範と丁寧表現の狭間で揺らぐ攻防に関する語用論的考察がある。
- 5) たしかに、米川 (1997) などには「～的な」「～の方」などの掲載はない。「～みたいな」は掲載あり (ibid. 208)。
- 6) 桑本 (2003b: 71f.) 「～するよりだったら」「～したっぽい」を参照のこと。また、山西 (2014) は、「～感」に対し、「してやられた感」, 「～的」に対して「みんなでやろう的な」など、長めのことばに付くようになったことを、2014年版 (編集は2013年) の若者ことばの特記事項として挙げている。
- 7) 若者ことばの略語形成の際の音韻的考察、また様々な類型については窪園 (2002, 2006) に詳述されている。

- 8) 小矢野 (1996) は、ドラマのノベライズ版の書籍物と、実際のドラマの音声に基づくものは、大きく異なっており、それは演者のアドリブが入っているため、特に若者ことばの表現がそういったアドリブに生かされている点を指摘している。

参考文献

- 稲垣吉彦「若者ことばクロニクル」『言語』第35巻第3号, 大修館書店, 34-39, (2006)
- 内館牧子『カネを積まれても使いたくない日本語』朝日新聞出版, (2013)
- 加賀野井秀一『日本語を叱る!』筑摩書房, (2006)
- 北原保雄編『問題な日本語』大修館書店, (2004)
- 窪園晴夫『新語はこうして作られる』岩波書店, (2002)
- 窪園晴夫「若者ことばの言語構造」『言語』第35巻第3号, 大修館書店, 52-59, (2006)
- 桑本裕二「若者ことばの発生と定着について」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第38号, 113-120, (2003a)
- 桑本裕二「若者ことばの形態論的および意味論的考察にもとづく諸特徴について」『東北大学言語学論集』第12号, 65-78, (2003b)
- 桑本裕二『若者ことば不思議のヒミツ』秋田魁新報社, (2010)
- 桑本裕二「若者ことばから現代日本語を考える—語彙分析, 通時変化を通じて—」秋田にほんごの会第144回学習会講演(2013年9月7日, 於秋田県民会館・ジョイナス), (2013)
- 小矢野哲夫『『ロングバケーション』の若者ことば』第6回すつきゃねん若者ことばの会配付資料 (1996年11月16日, 於大阪府高槻市立生涯学習センター, <http://www001.upp.sonnet.ne.jp/ketoba/long.html> より入手可能), (1996)
- 小矢野哲夫「流行語に見る今の世相」『日本語学』第21巻第13号, 明治書院, 44-54, (2002)
- 小矢野哲夫「日本語の攻防【文法】婉曲表現「のほう、みたいな」—丁寧さと規範のぶつかるころ—」『日本語学』第32巻第2号, 明治書院, 62-70, (2013)
- 永瀬治郎「語の盛衰—キャンパス言葉の寿命—」『日本語学』第18巻第10号, 明治書院, 14-24, (1999)
- 山西治男「若者」『現代用語の基礎知識 2013年版』自由国民社, 時代・流行「若者」の項の解説, 1144, (2013)

若者ことばにおける曖昧表現の形態および意味構造の変異について—テレビドラマのデータベースの通時研究への利用を目指して—

- 山西治男「若者」『現代用語の基礎知識 2014 年版』自由国民社, 時代・流行「若者」の項の解説, 1173, (2014)
- 米川明彦『若者ことば辞典』東京堂出版, (1997)
- 米川明彦「おもしろい現代語語彙」『日本語学』第 18 巻第 1 号, 明治書院, 41-50, (1999)
- 米川明彦「集団語に見ることば遊び」『日本語学』第 19 巻第 1 号, 明治書院, 54-64, (2000a)
- 米川明彦『集団語辞典』東京堂出版, (2000b)
- 米川明彦『集団語の研究 上巻』東京堂出版, (2009)
- 米川明彦「学生集団のことばの変化」『日本語学』第 31 巻第 11 号, 明治書院, 38-49, (2012)
- 米川明彦「日本語の攻防【語彙】若者語・流行語の戦い」『日本語学』第 32 巻第 3 号, 明治書院, 84-91, (2013)